

近代史学習のなかでの平和教育と自校史研究

角田 望

高等科2年生の世界史では、日本を軸として第2次世界大戦の終結までを教えている。第2次大戦・太平洋戦争・15年戦争は「歴史化」されるなかで「平和教育」の材料となっている。しかし、思想的な対立もあるので、その扱いは慎重を要する。ここでは大正時代の政党政治から昭和の軍事政権への「転機」をどのように理解するか、さらに自由学園がその時代をどのように歩んだかを生徒に解釈させる取り組みを紹介する。生徒は歴史的な事実を「解釈」することで自分の理解を深めて平和について考える機会を持ち、自校の教育に対する再認識にも繋がっている。

I. はじめに

「平和教育」を歴史学習のなかで展開したいと私は考え、授業を展開してきた。改憲論議が報じられ先の大戦についても歴史化が進行する現代において、戦争を「悲劇的なこと」「愚かなこと」と片付けずに、客観的に歴史的事実として理解しておくことが、今後の平和を考える上で重要だと考えるからである。

高等科2年生の2学期の授業では、男子部、女子部ともに20世紀前半を取り上げている。日本は日露戦争によって帝国日本を形成し、第1次大戦を経て日中戦争、太平洋戦争へと向かう時代である。特に1920年代から30年代は大正デモクラシーによる政党政治、市民を中核とする社会運動が展開しながらも、軍部による計画経済、統制国家へと移行した。

また、授業のなかで大正デモクラシーのもとで誕生した自由学園が、時代の趨勢にどのように対応したかを問題にしてきた。これは自校史の学習となるが、時代が戦争へと向かうなかで、どのように軍事政権に距離をおいて教育的立場を守ったのか、逆にどのような立場で軍国主義に対応したのかという厳しい問いが歴史認識として重要になってくる。

期末試験のなかで記述問題を加えて自分の言葉で授業の内容をまとめること、自分の考えを整理することを求めた。以下の記述問題は、男子部、女子部共通して出題し、試験の1週間前には課題を提示して調べたり考えたりする時間を与えた。私のところばかりではなく、担任の先生に質問に行く生徒もあった。

<記述問題>

次の記述課題のどちらかを選び250字以内で説明しなさい。

A. 政党政治を軸とする市民主義は、どのように軍国主義（軍部中心の政権）へと移っていったか、転機がどこであったかを説明しなさい。

B. 自由学園は、この時代に対してどのように歩んできたか、時代のなかでどのような立場を貫いてきたか説明しなさい。

男子部（33人）はAとBがほぼ半数ずつであったが、女子部（35人）ではAが23人（67%）であった。

II. 近代史のなかでの平和教育

政党政治から軍国主義への転換は、どのような連続面と断絶面があるのかという問題は複雑である。元老や貴族院、さらに天皇や宮中の動向も含めて理解する必要があり、「政党政治」も無産政党や社会運動の広がりを持っていたので私は「市民主義」という言葉で括った。多様性に注目すると図式的な理解は困難になってくる。しかし、多少図式的であっても政党、軍部を軸としてどのように戦争への道を歩んだかを理解することは必要だと考える。その「転機」を理解することが「平和」を考える材料として重要だからである。ただし、ここでは「歴史的事実に基づいて解釈を立てる」ことを問題とした。事実を羅列したとしても理解には到らず、解釈として自分の理解に落とすことを求めたいからである。逆に、筋が通っていれば複数の解答が可能となる。

私は転機として32年説を模範解答として考えていた。

<模範解答>

1932年が転機である。前年には満州事変が起り、昭和恐慌からの脱却が期待された。他方政党内閣には財閥と繋がってドル買いで利益を得たことに対する反発から、血盟団事件という右翼テロが起きている。五・一五事件は、軍縮に反発した海軍将校が首相官邸に侵入したテロであり、政党政治は終止符を打ち、政権はこれ以降海軍穏健派が首相となった。民衆が政党への不信感を強め軍部の大陸進出に恐慌からの脱却を期待したことが軍国主義への傾斜の背景となった。(213字)

II-1. 女子部の平和教育

女子部の生徒の解答は、教科書を読み込んできたと思われるものが多かった。転機を詰めていくと「昭和恐慌」と「広田内閣」というふたつのポイントでまとめられるとする解答が複数あった。

<G. Y. さん>

昭和恐慌が軍国主義への移行のきっかけを作ったと言える。昭和恐慌によって国民の政党への信頼は崩れ、かわりに軍部が台頭してきた。国民は軍への期待を高め満州事変を後押しした形になると言える。国内では軍の過激派や右翼団体が勢力を強め、五・一五事件で犬養毅を殺害すると、軍の穏健派が主導権を握るようになった。これに対して二・二六事件の後、広田内閣が成立すると、政府は軍の意見を鵜呑みにするようになり、計画経済を始めた。このことと日独防共協定の成立は、完全なる軍事国家への移行だと考える。(229字)

<I. F. さん>

市民のなかで政党政治への不信が高まり、軍部への期待が高まっていたのは昭和恐慌の頃である。その後血盟団により政党政治側の人々は銃殺され、ついに五・一五事件で犬養毅首相が殺されここで政党政治は終結したと言える。しかし、軍国主義へと移った決定的な転機は陸軍青年将校によって首都圏が完全に制圧された二・二六事件だと考える。ここで政党政治よりも軍部が強いことを確実に示したことで日本は軍国主義へと移ったと言える。その後は日独防共協定を結び軍国主義としての戦時体制を整えていくことになる。(237字)
この二人はポイントを同じくしながらも自分の言葉でまとめており関連性が微妙に異なっている。

視点を替えてテロと軍部の政治進出に光を当てて記述が以下のものである。

<A. Y. さん>

国家改造計画として、血盟団事件、五・一五事件、二・二六事件が起き、今まで中心となって政党政治を行ってきた人が次々に殺されてしまったこと。また、広田内閣で海軍陸軍の要求が受け入れられ、代って政治をする人々がどんどん軍関係の人になっていったことが大きい。また、関東大震災や昭和恐慌で国家が安定せず国民の期待が政府ではなく軍部に多く向けられたことも転機のひとつであると言える。(196字)

II-2. 男子部の平和学習

男子部は、教科書から離れ、全体というよりも局所的に転機を明確にしようとする傾向があった。以下の二人は満州事件という軍事的事件に注目している。

<I. Y. 君>

世界恐慌の影響により日本も不況になった。浜口内閣は金本位制への移行を行うが、これが世界恐慌の影響で失敗。統帥権干犯問題もあり政党内閣は国民の支持を失った。そこで内閣に代って軍部が台頭。「満蒙は日本の生命線」というスローガンを掲げ満州事変、そして国連脱退に繋がった。また、政党や財閥に対する不満の表れとして血盟団事件、五・一五事件などが起き国家改造運動が盛んになった。その後「国防の本義と其強化の提唱」二・二六事件による「国防の基準」などの政策転換により日本は軍国主義化した。(239字)

ここでは32年以降のことは「その後」としてまとめられている。

<T. R Y. 君>

1929年に世界恐慌が起ると翌年には昭和恐慌が起きた。当時蔵相、井上準之助は金本位制への移行を断行したため事態はより悪化することとなる。そんななか軍部が31年に満州事変を起し満州国設立、政府よりも軍部への期待が高まり始めた。当時東北では飢饉が起き食糧難が続いていたため軍部は「満蒙は日本の生命線」と市民に呼びかけ始める。この時既に失態を繰り返す政党政治よりも軍部による支配が良いと市民は考えた。このようにして軍国主義へと移っていったと言える。

(224字)

ここでは「市民」の心理的な転機に光を当てようとしている。

一步踏み込んで当時の人々の考えを取り上げたのが以下の記述である。

<H. M. 君>

政党政治を行っていた時、日本は酷く不況で食べ物にも困る時代になっていた。民衆は自分達が苦しんでいるのは国のトップが悪いからだと思い革命を望んだ。五・一五事件、二・二六事件により政党政治を行っていた内閣の人間が次々と殺されてしまい、海軍や陸軍の人が政治のトップをとるようになった。軍人が政治を行うと軍国主義（戦争を外交の主たる手段とする）になり、国力増強のために戦争をする方向へ政治を転換させた。

(208字)

ここでは国家改造運動が革命として望まれたことを内面的に理解しようとしている。他の生徒も「戦争をすることで豊かになるという考えがあったかもしれない」と推測している。

時代のスパンを広げてその転機を探ることは、次の記述を生むことになった。

<W. Y. 君>

軍部の力を抑えられなかったことが大きな反省点だと思う。大正デモクラシーの中で生まれた自由への渴望は様々な形で芽吹いていたが、第一に治安維持法の成立により反国家思想を持つ者を弾圧できるようになった。更に世界恐慌が起き国力が強くない日本は中国に目を向ける。ワシントン体制下では強硬手段に出られないと分かっているながらも中国を獲らないと日本が死ぬと叫ぶ軍部の大きな流れに飲まれ、政党政治に反対する将校らのたび重なるクーデターも相まって日本の民主主義は失われ軍部独裁へと移っていった。(238字)

「軍部」という組織は戦前に特徴的であるが、その肥大化を国家主義と重ねるならば治安維持法が遠因であると言うことは可能である。外交的に帝国主義の暴走が軍事独裁に繋がったとの解釈は正鵠を得ている。

II-3. 平和学習の取り組み

歴史を解釈する過程でその時代背景、歴史主体の主観的立場に理解を深めてゆくことは、自らの

「歴史認識」を深めることに繋がるはずである。歴史理解は、直接的に特定の価値観に結びつくべきではないが、歴史的事実を解釈するなかで現在の我々の歴史的立場について鋭い省察を求めることになる。「恐慌からの脱却を民衆が満州事変に始まる大陸進出に求め軍部に期待した」ことをどのように反省材料とするか考えることは、各自で深めていく課題となる。

III. 自校史研究

「自由学園」は、教育史において「自由教育」の代表として教科書に記載されていた（三省堂『日本史B』2008年、現在絶版）。しかし、教育史を越えた形での「歴史化」はされていない。歴史の趨勢のなかで自由学園の歩みを重ねることは「解釈＝評価」の問題でもあり、現在の学園生活を歴史的にどのように捉えるか考える機会となる。

私は模範解答として以下のものを考えていた。

<模範解答>

自由学園は第1次大戦後に出現した中産階級の教育を担うものとして1921年に創立された。23年の関東大震災の救援活動を展開するなかで「社会に働きかける学校」を方針とするようになった。昭和恐慌で東北凶作が起きると農村セツルメントを展開、卒業生などを東北に送って不況を乗り切る生活合理化を実行。満州開拓という海外進出とは別の道を示した。日中戦争下、38年からは北京で生活学校を始め、「仲悪」を共通の敵とする「平和の戦争」という考え方は、人間教育を軸として軍事的な戦争を乗り越えようとするものであった。(250字)

III-1. 女子部生の自校史研究

女子部の生徒の回答は、具体的な活動内容に言及したものが多く、東北支援を託児所として位置づけていた（東北セツルメントを託児所だけに限定することには事実として偏りがある）。また、「教育者の立場」に一貫性を認めていた。

<K. Y. さん>

教育が必要だと考えた羽仁もと子が中産階級の人を主に、自由学園を1921年に創立した。農村セツルメントでは東北の大凶作によって両親共に夜遅くまで働かなければならなくなった人達の為に、東北に託児所を開き、小さな子供達を預って世話を

した。北京生活学校では、羽仁もと子が敵とこそ仲良くならなければならないと考え、北京生活学校を開き、日本語から様々なことを教えた。羽仁もと子は時代のなかで、ぶれることなく教育者としての立場を貫いたのだと思う。(217字)

<H. N. さん>

自由教育の波にのり、中産階級の学校を創立したが、創立後東北大凶作が起り、生徒らが現地に行き仕事で忙しく子供の面倒をみられない親のために託児所を開き生きていくために必要なことを教えるなどの支援活動をした。また、北京で戦っている時には、相手国だからこそ仲良くする必要がありと考え、北京の少女らを集め技術や生活面を教育する学校を開いた。自分たちも苦しいはずの時代に人のために何かをしようと考え行動することをしてきた。(211字)

次の回答は、「セツルメント」の原点が関東大震災であることを指摘し、支援の活動を「生活合理化」と特徴付け生活合理化展と繋げている。学園史について独自に調べた記述である。

<I. MA. さん>

自由学園は21年に中産階級の子供の教育の為に創立された。関東大震災の年からセツルメントという支援を行っていた。具体的には、生活を合理化すること、衛生教育から人間教育までの支援していた。また、生活合理化展も開かれた。そして日中戦争の中、戦争参加か人間教育かの流れがあったが、自由学園は人間教育を選び取り、北京生活学校を作った。同じ人間なのだからと、日中戦争の中、北京へ行ってそこでも人間教育や生活講習などに力を入れて取り組んだ。(218字)

自由学園の主観的意図と客観的な評価を区別している点において注目される解答もあった。

<I. MO. さん>

自由学園は1921年に創立された。学園はその頃盛んであった大正自由教育や美術教育の先がけであった。東北が大凶作に見舞われた際には羽仁もと子や生徒らが東北に出向き農家を手伝うというよりは子供達を預り生活の基本を身につけさせ教育を行った。日中戦争が始まると北京生活学校を開設した。戦意の高揚より、北京の子供達への慰め、協力という形で二十四時間寝食を共にし生活の基礎を学ばせ、人間教育を行った。この学校の

開設は、創立者は人間教育としてしているが、戦争への協力ともとれる。(231字)

III-2. 男子部生の自校史研究

女子部に比べると男子部生の回答は「思想史」的傾向が明確であった。抽象的思考の表れであり、「中産階級教育」「キリスト教精神」「民主主義教育」という思想史的潮流として学園の教育を解釈しようとするものである。

<T. A. 君>

1921年今まで上流階級を中心にされてきた教育を「国は中産階級が支えている」という中産階級育成をモットーに自由学園は創立された。創立してすぐ関東大震災が起きこれを支援したり、東北で飢饉が起こると被災地に支部を作り農村セツルメントとされる被災者の生活力を上げる指導を<在校生>>卒業生らが行うという活動をした。1937年に日中戦争が起きると、翌年北京に生活学校を建て「太陽はひとつ」という思想のもと中国人に人間教育を行った。このように、自由学園はキリスト教精神を貫き人間教育を行ってきた。(240字、在校生の参加については後述)

<T. R I. 君>

大正自由教育は、大正デモクラシーの風潮に風をおされ、その中で自由学園は「真の自由人を育てる」学校として1921年に創設された。農村セツルメントでは、東北の凶作の際に貧しい主婦を対象に裁縫技術の伝達を行うなど、学校で学んでいる事を社会貢献という形で示し高い評価を受けた。また北京生活学校においては、38年の日中の関係が心配される中で創設され、国が武力で関係を築こうとしたのに対し「生活即教育」という独自の教育において日中の親善をはかろうとしていたことは世界でも認められている。(249字)

<F. Y. 君>

「自治は民主主義のもと」という文章の「良民を育てる」ということが自由学園の大きな目的であり、創立の理由といえる。中産階級にそのような良民を育てることで、民主主義社会をつくるという立場を貫いてきた。これをもとに、田舎などのまだ発展していない所へ行き、自分達も生活しながら技術や生活というものを教えていく活動を行なった。またこの活動を北京にまで広げ、暴力的

でない<良い侵略>を行なった。激化してゆく戦時体制の中で、学園の存続と理念の存続は厳しい時代だったがうまくバランスをとっていた。(249字、「良い侵略」は不十分な表現である)

最後に、自由学園と軍国主義化した政府の「対立関係」に焦点を当てる記述が以下である。

<O. A. 君>

日本が外国に戦争をすると決まった時、羽仁先生は生徒たちに生きるためにどうすればいいのかを教えるため、学園で農業を始めました。そして日本政府が中国に洗脳教育をするために中国でたくさん日本の学校を作りましたが、羽仁先生は違って、北京生活学校を作った後、中国人にも日本の自由学園の生徒と同じ教育を行いました。こうすると明らかに日本政府の指示に従っていないですけど、それでもキリスト教にもとづいた羽仁先生の教育は、きっとこんなことを許せないから、リスクを持って教育を行ったのです。(248字)説明が不十分であるが、「農業を始めた」というのは41年に男子部が那須農場を開いたことを指しているであろう。キリスト教精神が軍部に対してリスクを負うものであったことは確かである。

<H. T君>

自由学園は、中産階級を育て女性の立場を大きくするための市民主義を作ろうとしていた。昭和恐慌により持てる者、持てない者の差が広がると、家庭を通じての社会・世界改造ができないと考えた「もと子」は、そのきっかけとして農村セツルメントを行った。日中戦争が行われる中で政府は日本の言語、文化を教育する意味でも侵略を行っていた。自由学園は政府に協力する立場を見せつつも、学園の方針である人間教育を行うため北京生活学校を創立し日本政府に反逆しない型で中国でも社会改良を行おうとしていた。(236字)市民主義の生活合理化を格差是正でもあったとする解釈は優れており、政府への協力と社会改良が表裏一体であったとする理解も、微妙な関係を鋭く表現できている。

III-3. 自校史の取り組み

歴史において自由学園を歴史化する取り組みは、生徒達にとって自分の受けている教育を客観視する機会となった。紹介できなかった回答には「これ

は共生の意味を含んでいた」という気づきでまとめたり、「弱き者を助け決して強くはないが、自分達の意志をもった学校」と多少美化した言葉を記す生徒もいた。これらはそれぞれの言葉で学園の理想を言語化する意味があったと思われる。ただし、今回の自校史研究が「軍国主義のなかでどのように自由学園教育を守ったか」を明らかにするとしても、「自由学園が軍国主義にどのように抵抗したか」を明らかにするものではなかった。

ところで、今回の取り組みを100年史編纂委員会で紹介したところ、重要な指摘をいただいた。すなわち、東北セツルメントの主体は、「自由学園」というよりもむしろ「友の会」であり、在校生の参加は長期休みの例外的なものしかなかったことに注意すべきであるというのである。東北セツルメントは羽仁もと子を軸として行われたとしても、「自由学園」と安易に繋げることはできないのである。このことは羽仁もと子の活動の幅広さを逆に照らし出すものである。羽仁もと子は学園創立者である以前に社会活動家であり、卒業生の活動は「社会によくするための社会運動」であった。東北セツルメントは卒業生(吉田幾世)と友の会の働きによって結実したのであり、その成功が今度は自由学園を主体とする北京生活学校に繋がったのである。卒業生が羽仁もと子の働き手として活動を支えたことは看過できない。このように、自校史の研究は、現在では見えなくなっている歴史的脈絡に光を当てることにもなるのである。

参考文献

- (1)北岡伸一『日本の近代5 政党から軍部へ1924~1941』中央公論社 1999年
- (2)全国友の会中央部『農村合理化運動 東北セツルメントの記録-昭和9年~14年』1989年
- (3)松本郁代「1930年代における『田山セツルメント』および『小湊セツルメント』の様相」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』(1)、2001年
- (4)内田知行『抗日戦争と民衆運動』創土社 2002年